

予の水彩畫に着手せし

動機及經過

鎌倉 長谷川 晚雪

予が水彩畫を初めたのは明治二十九年一月のものである、予は静岡の小學校に奉職せし頃、同僚が水彩畫を描いてゐたのを見た、友人は花の寫生をしてゐた、其人から聞いて五十錢の水彩繪具と、十二錢の筆を購入して塗つたのは予の稽古の初めである、其頃師範學校に居る岡畫の先生に就て水彩畫を學びたいと願ふた、其れから、主に鉛筆畫と擦筆畫とで、寫生をやつて水彩は漸次實物をやつた、忘れもせぬ生れてから始めての寫生は支那枇杷であつた、此繪は大切なものとして今日も猶保存して居る、先生からも賞められた、此傑作は將來の紀念となり又奮勵の動機となつたかも知れぬ、爾來三ヶ年間教鞭を取りつゝ、恩誼ある其先生に就て教導を受けた、其頃同志の人は今美術學校に居る人と、大學工科に居る人と濱松中學に居る人と予とである、予は三十二年六月に此恩師や諸友や懐しい静岡と別れて

東京の學校に入學することになつた、翌々年四月に卒業して赴任したのは信州であつた、丁度そのころ水彩畫家の丸山晚霞先生が、歐米諸洲を歴遊されて、歸朝された時で、其年の十二月信州の御宅で、始めて先生にお目にかゝつた、先生から色々珍しい物を見せて貰ひ、懇々と教訓を受けた、爾來自然の景色に親しみつゝ、(すこし過言なれども)筆を下しつゝ、今日に至つたのである、今日まで殆ど十年間、長い年月の間繪具をこねくり時に大家先生の御批評も受けたが、繪畫の技術の至難なる予の鈍才を以ては中々に進歩せぬ、併しながら予は水彩畫が性來好きであるから決して止めぬ、時々用事の爲めに妨げられても、時機を得れば筆を探る、昨年の夏は大下先生丸山先生が催された青梅水彩講習會に於て指導を受けて愉快なる暑中休暇をしたが、今年には本縣にて手工科の講習を開く筈で殘念ながら去年の様な愉快な有益な消夏方法を探れぬ、實に遺憾に耐へぬのである(完)

寫生半日

日は、六月第一の日曜であつた、晝飯を終るや、否、寫生器具を肩にして目的地へと出掛けた、場所は御幸村還熊八幡社の近傍である、單騎遠征、社の石階の下に三脚を据ゑて、四つ切形の畫板を懸けた、遠景は伊豫の小富士に、中景はガタ馬車の通ふ山越堤、そして前景は社の馬場である、約一時間費し仕揚を大概にして此處を發した、風早街道を北へ堀江近く歩を進めて、平田妙見堂の丘へと志した丘上は堀江濱を眼下に白帆點々、島も舟も畫中のものである、前景にお旅所(祭禮の)松と綿畑を配して、二面の寫生を試みたのである、三人のはなつたらしは始終畫架の傍に立つて、至極障害であつた、時々往來の先生達も見て居る、しかし、お前方に水彩の趣味が分かるものかと云ふ權幕で、一心不亂……遠くに響く工場の六時の汽笛を聞きてやをら器具を仕舞つて凱旋の途に着いた、赤陽は大山寺山の端に春て、暮色に滿々たる七曲り道を、馬車埃りを破りつゝ、